



黒猫が鳴く

松井 奏

(茨城)

今日からは頑張りますそう言って何もできずに終わる祝日

青白く光る夜明けの冷えた空今日を感じてゆっくり起きる

先生の怒鳴り声が響く教室にしれっと入りちよっと引かれる

飲みかけで放置していたゼロコーラ炭酸抜けてぬるくなっていた

千年後世界はどうなっているだろう嘘のようで本当の事

一限目二限目終わりもう瀕死机に伏せて三限目待つ

八月の駅のホームの隅っこで夜明けの空に黒猫が鳴く

ここからが地獄になるぞ鉛筆を握りなおしてページをめくる

レコードに染み付いたそのいい匂い少し落ちてくさびれた匂い

ヘッドホン越しに聞こえる雨の音小筆に変えて目の光描く

心からいやだなあとと思うことチャラチャラしてる友達グループ

後悔はしないはずだと言い聞かせ中学校の階段上る

イヤホンつけて断ち切る外の音頭の中にノイズが走る

登校中いつも見かけるトラックに少しだけ手を振って見せたり

街灯が流れるように点いていくぼつぼつと降る雨に押されて

このごろの私

最近、玄関の鉢植えにアマ
ガエルが住んでいる。近くに
田んぼがあるので、そこから
やってきたのだろう。腫が丸
くて可愛い。水をかけても動
かず肝が据わっている。それ
にしても宿題がっらい。



再 発

谷川 恵
(埼玉)

このごろの私
冷凍野菜の便利さに気づき
すっかりはまっていて。プロ
ツコリーから小さい虫が湧い
て驚かされることもなく、安
心安心。土のついたままの野
菜を直売所で選ぶのも楽しい
が、つい楽をしてしまう。

「再発してますね」の声に真つ先に反応しめず看護師の皺

お久しぶりですと笑顔の脳外科医 できれば再会したくなかつた

車椅子押して検査を廻るとき父はしづかにわが波に揺る

おんがくもほんもいらぬやすんでる 視線の合はぬ父の眩き

脳梗塞再発率のウェブサイトで閉ぢる帰路のタクシー

三人で暮らした家はがらんだう庭のトマトの赤がまぶしい

ゆふがたの浴室に閃光走る 瞬きすればただの壁なり

瞳孔をひらけばうすい網膜も夏の不安も透けて見えなむ

早口の説明のなか加速した〈加齢〉は逃さぬ三十五の夏

うすいうすい網膜だつてまだ見える暑さにもほひも感じるくらい

あさがほの写真を送る朝があり〈生きてた!〉と庭を愛でる父あり

萎みたる時間に何を思ふのか教へてほしい明日のあさがほ

修道院の跡地にふつと木陰あり静寂ののち蟬の声降る

抜け殻は日射しを受けたからからり飴色深き蟬のたましひ

夏らしいことをせぬまま盆になり鍋焼きうどんをゆつくり食べる